

平城宮跡・藤原宮跡の整備

平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部

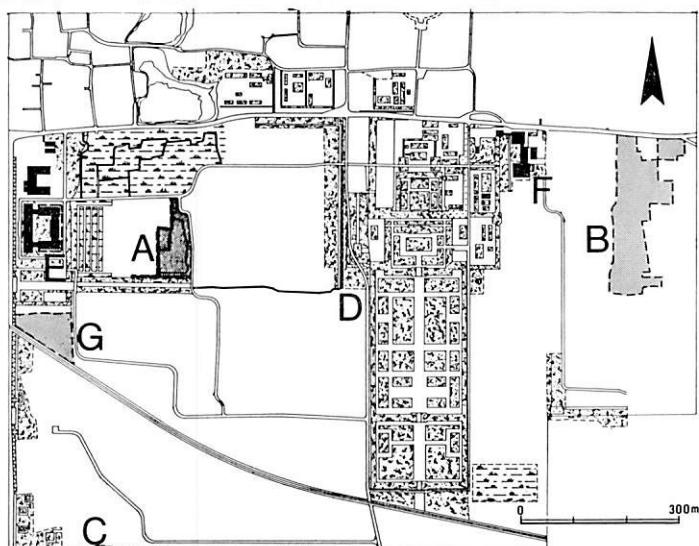
1. 平城宮跡の整備(9)

1978年度の宮跡整備は、草園整備、法華寺町民家隣接地の盛土整地、水路改修、平城宮資料館周辺灌木植栽、便所新設、資材置場造成および覆屋展示施設模様替工事を行なった。

草園整備 平城宮跡北西部の北から南に走る谷筋で、御前池・佐紀池に連なる湿地帯を利用し、北を1971年に整備した草園に、東および南を道路に、そして西を資料館に囲まれた地区の東部約 $6,900\text{m}^2$ について、水面の造成を主とした整備を行なった。水源となる佐紀池の池底高との関係から水面高が制限されるため、自然流下で溜め得た水面は約 $4,600\text{m}^2$ 程度である。また現況地形からは15~25cm以上の水深を得ることはできず、いずれ雑草により水面を覆われる可能性も大きいことから、雑草の根株を除去することのできる範囲(10~20cm)の表土のはぎ取りを行ない、最大35cmの水深を得るようにした。池の西側では旧畦畔を残す形で苑路とし、池側は焼丸太柵を設け、汀線は竹柵により護岸を行なった。なお竹柵は遺構に影響を与えないよう池底面でコンクリートの根まきを行ない杭の打ち込みは避けた。池外周部はススキを、苑路沿いにはコバノガマズミ、ナツハゼ、ハギ等を植栽し、水面内には水中に床を造成しマコモおよびカキツバタを植栽した(第1図A)。

法華寺町民家隣接地の盛土整地 1972年の夏から秋にかけての異常乾燥のため、宮跡雑草地内でワラジ虫(甲殻綱等脚目ワラジムシ科 *Porcellio scaber*)が大発生し、隣接民家に侵入するという苦情を連日受けた。調査の結果、枯草堆積層や腐植土中にワラジ虫が多数認められたため、種々の殺虫剤散布、草刈や耕耘除草などを実施したが、市販されている薬剤ではあまり良好な結果は得られなかった。耕耘除草作業についても実施可能な面積に限界があり、労働力および経費の面からも今後継続的な実施があまり期待できないことなどから、未整備雑草地に隣接する民家の多い宮跡東辺中央部について平均30cm厚の盛土・整地を行ない、害虫の繁殖を防止できるよう処置をとった(第1図B)。

水路改修 今年度は宮跡南辺部および中央緑陰帶内水路



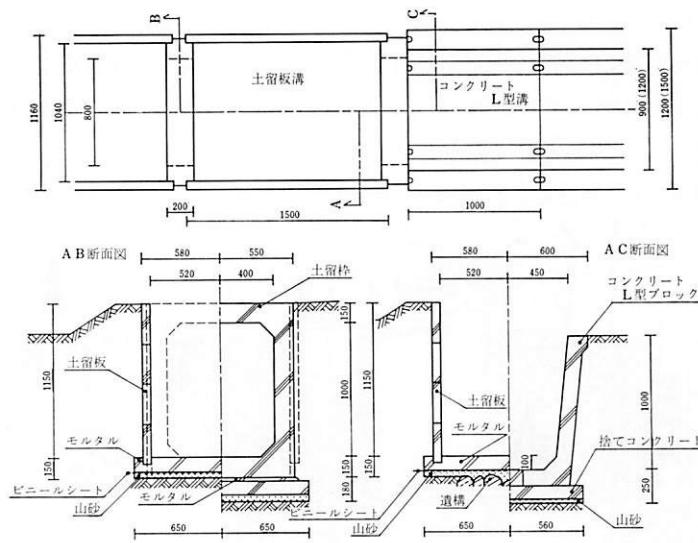
第1図 平城宮跡整備図

の2ヶ所について改修を行なった。

南辺部の水路は、宮跡内の雨水はもとより、北側の佐紀町の集落および秋篠川以東の二条町一帯の雨水排水が流入する幹線水路である。しかし水路は素掘溝で浅く狭いことから、宮跡南側の田畠の冠水や民家への浸水が多発する状態であった。そこで1mの高さのL型コンクリートブロックを内幅1.2mで両側に立て、ブロック間の溝底部分をモルタルでつないだ。なお本水路は平城宮の南を画する築地大垣と平行し、一部では築地基壇と重なり、朱雀門基壇部分およびその付近で築地基壇遺構の残存を確認したため、残りの良い東方約390m分は水路幅を0.9mに縮め施工した。また朱雀門跡では水路底面より礎石の根石を検出したため、溝底計画高を10cm上げ、根石を砂養生し、その上をビニールシートで覆い、モルタル敷きの上に土留用コンクリート板を溝の両側に立て、後日取り外しの容易な工法をとった(第1図C, 第2図)。

中央緑陰帯には遺構表示として、第2次内裏外郭築地の西側を流れる南北大溝(SD3715)を和泉砂岩割石で護岸し表示しているが、当初50cm程度と推定していた溝幅は、その後の調査によって1.2mであることを確認したため、割石溝を1.2m幅に拡張する工事を約160mについて行なった(第1図D)。

その他 資料館建物の修景および展示、研究室と外部一般利用者との分離を目的とし、資料館外周の東側および南側にハクチョウゲを、北側にヒサカキを316m²について植栽を行なった



第2図 朱雀門跡付近水路改修詳細図

(第1図E)。見学者の増加に伴い特に東方覆屋地区での便所の増設要請が強く、埴積覆屋の東側に鉄骨ブロック積造の便所(38m²)を1棟新設した(第1図F)。その他発掘調査や整備用の発生資材(石材、木材、玉砂利等)の置場として、佐伯門の南で近鉄線までの宮内道路と西面土塁に囲まれた地区を整備し、周囲に高木植栽を行ない外部からの景観を考慮した(第1図G)。

平城宮跡・藤原宮跡の整備

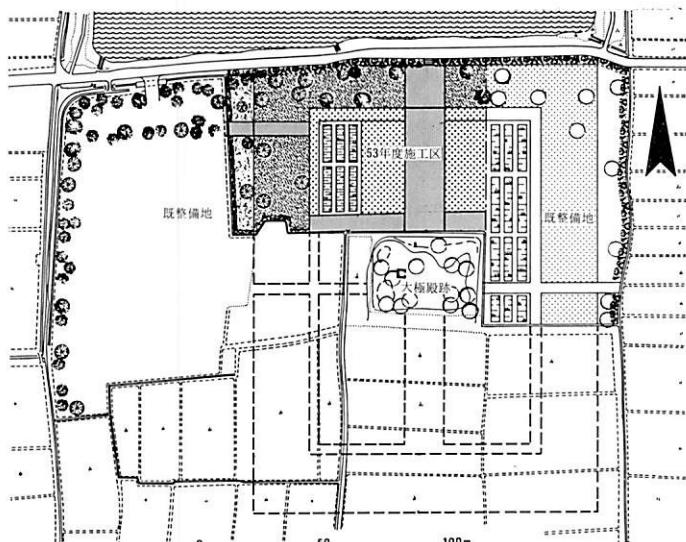
2. 藤原宮跡の整備(3)

1975年度に作成した藤原宮跡の大極殿・朝堂院地区についての暫定整備計画（1976年奈良国立文化財研究所年報）にそって、大極殿北東部・北西部の整備を2ヶ年にわたり実施して來たが、今年度は大極殿北部の旧鴨公小学校跡地（約5,360m²）について整備を行なった。工費は22,000千円であった。

遺構の表示としては、1975年に始めた大極殿を囲う回廊を保存ブロックとし、まだ部分的にしか発掘調査が行なわれていないことから、回廊遺構をその中に含んだ幅（22m）で凝灰岩縁石をまわし盛土し張芝を行なった。また昨年度の発掘調査の結果、朱雀大路の計画線（幅員15m）が大極殿のすぐ北側で確認されたため、この範囲をクラッシャーラン敷きとし苑路とした。その他大極殿の北側で東西方向に一条の掘立柱列が検出されたことから、これを表示する意味で大極殿との間をクラッシャーラン敷きとし、西側からの苑路とした。

回廊保存ブロックの内側は玉砂利敷きとし、その中に初年度に実施したと同様、今後の整備に使用できるような灌木類を育成する苗圃を造成し、アセビ、クチナシ、ジンチョウゲ、ツゲ、ハギ等の苗木を植栽した。高木の植栽は、1971年度に造成した西側の多目的広場および駐車場の外周を中心、アラカシ、イチイガシ、オオシマザクラ、シラカシ、ツブラジイ、モクセイ等82本を用いた。また鴨公小学校運動場跡地の西および南西隅部については、多目的広場との間にレベル差があり、両者間に溝も並行していることから、転落等の危険性を考慮し回廊保存ブロック側に灌木の植栽を行なった。

（渡辺 康史）



第3図 藤原宮跡整備図



第4図 藤原宮跡の整備状況